

「横浜商業学校表忠碑」の教材化

～歴史総合を視野に入れて～

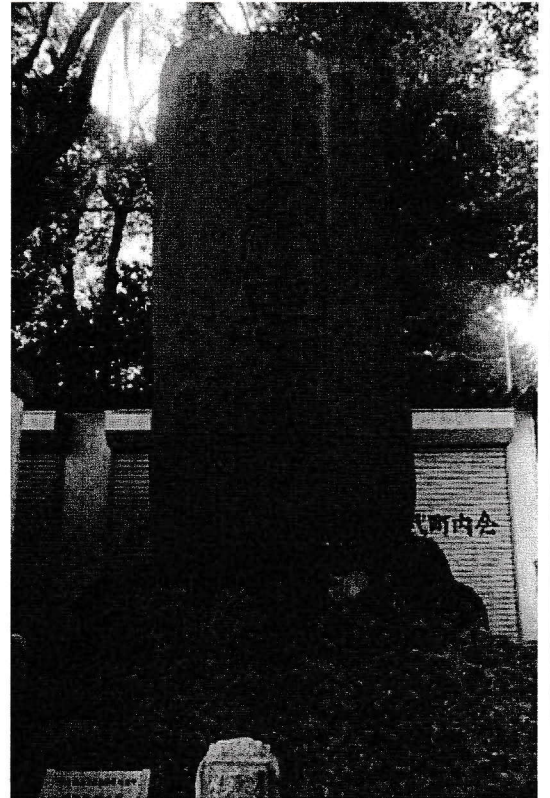
横浜市立横浜商業高校 智野 豊彦

1 はじめに 歴史総合実施に向けて

1922年度から新課程になり、地歴公民も大改訂が行われる。その中でも、「歴史総合」は、新しい名称の科目として注目されている。その内容は、「平成30年告知」により報告がなされ、我々も概要を把握することができるようになった。新科目に向けて、現時点で現場の教員が対応するために、「歴史総合」について把握できていることを確認していきたい。

① 減少し続ける授業時間

私の世代が高校生の時の地歴科(当時は社会科)の最小の基準は、「地理」2単位・「世界史」4単位・「日本史」4単位で、歴史は合わせて8単位で学んでいた。さらに社会科として「倫理社会」「政治経済」という多くの連携できる科目を学んだ。それが、幾多の変遷をへて、学校によっては地理を選択している場合もあるが、多くの学校では現在、「世界史A」2単位、「日本史A」2単位、合計4単位となっている。これは、筆者が務めるY校の商業科も同様である。これが歴史総合では、日本史・世界史合わせて2単位となる。ただし、「地理総合」2単位が必修となる。



② 「歴史総合」の性格

科目理念としては、「現代的な諸課題解決を視野に入れた学習課題設定・考察」をさせるとともに、「歴史的変動過程を中長期的な時代区分により考察させる」ことが主軸となる。また、かつて「日本史」「世界史」と二分していたものを、「世界・日本・地域の重層的な関係に着目」させていくこともうたわれている。いずれも、授業時間を減らされるにもかかわらず、歴史教育にとって重要な課題が課せられている。また、できることなら「歴史総合」を学んだ生徒が、基礎学力と興味関心を持ち、その後の「発展」科目に繋げてもらいたい。しかし、大学進学をしない生徒や、これが学校で学ぶ最後の歴史教育である生徒が多数存在することは、常に念頭におくべきである。

2 身近なものの教材化

大幅な時間減にもかかわらず、歴史教育に重要な課題を持つ「歴史総合」の理念を活かす教材とはどのようなものであろうか。様々なものが考えられるが、その一つは、生徒にとって「身近なものから歴史を考えさせる」ことである。これは、従来からも取り組まれている方も多いものである。新しく求められている学力観は、現行のものと切断されたものではなく、換言すれば、今までの授業教材が、修正によって「歴史総合」でも有効なものになる。今回の発表は、現任校の授業実践である「身近なものから歴史を考えさせる」を紹介していくことで、「歴史総合」という新しい科目を考えていく

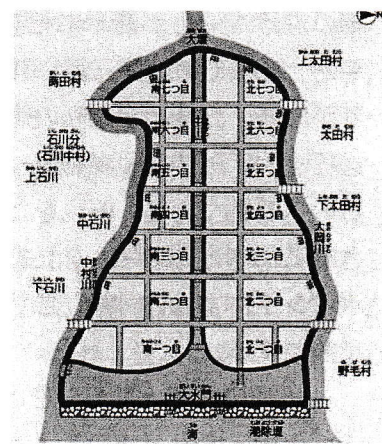
一材料とするものである。

生徒にとって「身近なもの」は多種多様である。その中であって生徒全体に共通する「身近なもの」として、通学する学校そのものに着目している。これは、公民科でも同様であるが、歴史科目では地域や学校の特色から歴史の学習に繋げていく。この取り組みは、前勤務校が横浜中華街の中にあり、周囲に授業教材に使用できるポイントが多数あったことから始めたもので、現任校の横浜商業高等学校（通称Y校）に数年前に転勤してからも継続している。以下に、日本史Aを中心に本校での実践を報告する。

通常の授業ではできる限り教科書に沿って行っている。これは、教科書をきちんと読むことが出来る能力の育成は重要であると位置付けているためである。教科書をはじめ、文章を読めない生徒が多いという危機感を抱く教員は多い。その解決のためには、生徒が教科書を読む機会を折に触れ提供していく必要がある。このため、生徒はプリント配布を望むが、私は現任校ではそのニーズに応えないことにしている。それは、生徒が望むプリントとは、それだけを抑えれば試験に対応できるものであり、プリントを配布された生徒の大半は、教科書をほとんど開かないからである。

①所在地

横浜商業高等学校は、横浜市南区南太田に位置する。ここは、吉田新田埋め立ての起点の近くである。大岡川と中村川が分岐する重要な起点には日枝神社（おさんの宮）が勧進されている。吉田新田の埋め立てから、横浜港と横浜駅を中心とした発展、また、その後の令和にいたるまでの歴史を概観させている。



②学校の歴史

横浜商業高等学校は、1882（明治15）年に設立された横浜商法学校からはじまり、1888年に横浜商業学校と改称され、1905年に現在地に移転してきた。その後も変遷はあるが、長い歴史を経て現在に至っている。この学校史そのものが、歴史を学ぶ教材として有効なものである。その中の一つが今回のテーマ「横浜商業学校表忠碑」である。この表忠碑は、日露戦争における横浜商業学校卒業生の戦没者武勲の記念碑で、高さ約4m、幅約2m弱ある。1906年に建設が話し合われ、翌年、横浜港を俯瞰できる伊勢山にて除幕式が行われた。「表忠碑」の三文字を揮毫したのは、乃木希典である。これは、戦没者の多くが、乃木第三軍に属していたことによる。

3 「横浜商業学校表忠碑」を使った授業実践

①石碑の読み取り

まずプリントの写真によって、主題の表忠碑は、日露戦争における戦没した先輩にかかわることを読みとらせる。そのために、石碑の横にある看板をみせ、この石碑を整備工事しているのが進交会（Y校同窓会）であることから出発する。そのうえで、石碑に「明治三十七・八年戦役横浜商業学校出身陣没の士」という文字を確認させる。その際には、「卅」の字と篆刻「表



忠碑」は、教員側が教える。また、明治 37・38 年が、1904・1905 年であることも補足する。1904 年に、日露戦争が起きたことを知っている生徒はいるので、この表忠碑が日露戦争における先輩の陣没碑であることが認識できる。ただし、揮毫者「希典」については、乃木希典を知る生徒はほとんどいないため、この時点では後ででてくることだけを話して終える。

② 戦没場所と日時（作業学習）

石碑の裏面は写真では判読が困難なので、プリントに印刷したものから、戦没者氏名・階級・戦没した年月日・場所・年齢を記入させる。そのうえで、陣没地を地図にマークさせる。さらに、陸軍主要戦闘の日時で、どの戦闘での戦死か理解させる。授業時間は限られているので、個人名や年齢は記入させないことも考えたが、陣没者一人ひとりが名前をもった生きた人間であることを認識させたく時間をかけている。「道具」ではなく生きて一人ひとりの存在に、少しでも思いをかけさせたい。ありがたいことに、生徒の発言には、「この人たちは同じ年齢で、同じ日時に同じ場所で死んでいる。高校のとき同級生だったのかな？」など陣没した先輩の戦争以外での活動を想像したものがあ

る。私がこの石碑を初めて見た時には、陣没者全員が乃木第三軍であり、地図に落とし込めば、乃木軍の進軍ルートが簡単に把握できると想定していた。しかし、よく見ると最初に陣没した「鈴木順平君」をはじめ、第三軍以外に従軍し陣没している者がいる。このような私の想定と違う結論にいたる過程を、データや図表を使って生徒自身に検証させるのも目的である。仮説をたてデータでそれを検証させる思考は、「探究」を見据えて身に付けさせたいポイントである。同様な趣旨の表が階級と戦闘での役割である。

「伍長田邊新太郎君」を除き、陣没者は尉官である。少尉・中尉が率いる人数から戦闘時には、先頭を切って戦っていたことを想像させたい。その結果が職員と卒業生 97 名従軍のうち 12 名死亡につながっていると、私は現時点では考えている。日露戦争での死亡率 12% 強が高いのか標準なのかは結論を出すにいたっていないが、このような仮説をたててみることの大切さを感じてくれることを期待している。

③ 史料文（横浜商業高校 80 周年誌）の読み取り

多くの高校現場で、教科書をはじめ本や文章を読み取る能力の育成が課題となっていることをきく。本校の生徒も同様に、文章の読み取りは苦手である。そのため、授業では「80 周年誌」を音読させる。この史料から以下のことを読み取った発言がある。「日露戦争時に現在地に移転している。」日露戦争という国運をかけた戦争においても、平時があることに気づかせたい。これは、現在でも様々な紛争のニュースが流れたときに、その映像だけが全てであるように認識している生徒が多く、それを是正させるきっかけとしたい。



「ソロバンなら家郷にあって持てるではないか、兵科を志願して堂々と銃を担え」という初代美澤進校長の弁にショックを受ける生徒もいる。美澤進校長は、美澤皆勤賞・講堂にある3m弱の石膏象・使用していた机の展示など、現在でも生徒がその名を知り尊ばれている存在である。なお、本年2019年は、美澤進校長生誕170年で、文化祭において進交会（同窓会）主催にて企画展示が行われた。その美澤進先生が、「イクサが好きだ」といわれるような指導を行っていたことも事実である。しかし、単に美澤進先生が軍国主義であったと悪いイメージを持って終わるのではなく、当時の世相や国家の要請と学校との関わりに関心を向けていく工夫が必要である。同様に、「一旦緩急あれば義勇公に奉ずるのは“誠”の精神の発露である。」も、校歌をはじめ建学の精神が、戦争に利用されていることも、考えさせていきたい。



現在行っている日本史Aでは、旅順要塞二百三高地攻略の目的理解のために『進撃の巨人』のシーンをプリントに載せている。漫画をはじめ様々なものに、歴史的事象が敷衍されていることも、気づいて欲しい。陣没者をはじめとした多数の手紙を生徒に見せている。残念ながら、手紙は、行書・草書でほとんど読めないが、実物へ生徒は関心を示し、卒業したら解説してみないかと薦めている。

先日も「太平洋戦争」前の学校アルバムをみることができた。そこには、学校長とともに軍服姿の人物が掲載されていた。宇垣一成陸相による軍縮と現役将校配属による軍事教練導入につながる資料として有効なものになると考えている。今後も、横浜商業高校にかかわる資料の教材化を進めていきたい。

4 おわりに 世界史的視野へ

ここまで「地域」から「日本」をみる日本史Aの授業実践を紹介した。歴史総合にむけて世界に対して重層的にとらえ、歴史的変動過程を中長期的な時代区分により考察させるために、現在考えていることを述べる。今でも生徒のプリントには、『欧亜外交地図』をはじめ日露戦争を描いた数枚の風刺画を載せ、また日英同盟（1902）と英仏協商（1904）を紹介することで、余裕があれば国際関係にも興味をもたせるようにしている。

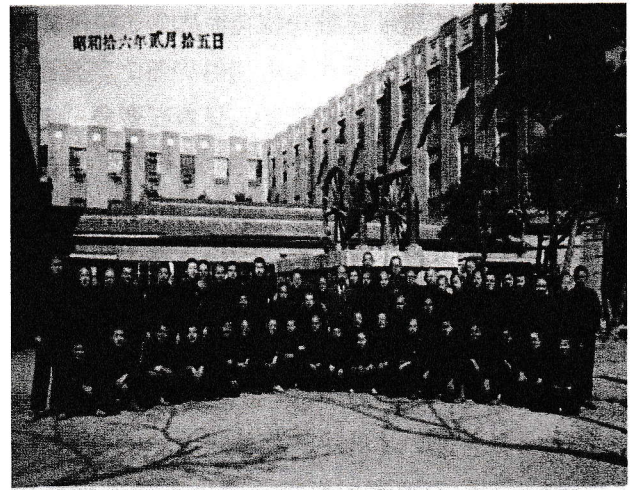


これらの風刺画からは、ロシアの南下政策や、国際関係での「代理戦争」としての日露戦争を学ばせることができる。同様に冷戦期の朝鮮戦争やキューバ危機などを米ソ陣営の枠組みで理解させることも多いだろう。しかし、個々の国々や人々は単なる「代理」ではなく、主体性をもった存在であるということも認識させたい。Y校先輩12名が死亡した日本にとって国運をかけた大戦争も、代理戦争という見方もできることを示すことで、逆に「代理」とみている客体の主体的存在に気

づかせたい。

近代的な国際秩序を形成していくなかで、日露双方が、他国の領土に分け入り、これに対する抵抗がみられる。このような動きはバルカン半島などとも共通する。また、日露戦争は、その前の日清戦争、清仏戦争そして琉球処分など、中国を中心にした冊封・朝貢体制が崩壊し、主権国家による新しい国際秩序が再編されていく過程でもある。一人ひとりの人間の営みを考えながら同時に、世界と時間を俯瞰して捉える視野を身に着けさせたい。

最後に、学校史によれば、陸軍省より卒業生多数従軍の功績として、戦利品の「双輪式47ミリ速射



砲一門」と単発歩兵銃外15点が下付されている。この学校史を授業で最初に取り上げた直後、偶然であるが、昭和16年2月15日に、大砲の前でとった集合写真が発見された。この写真に載っている大砲が戦利品ではないかと個人的には推測している。この写真に対して、ある生徒が「今この大砲はどこにあるのか？」という疑問をだした。それに対して、昭和16年は、太平洋戦争が開始された1941年であることを指摘したところ、一人の生徒が「鉄の供出でなくなったのではないかと」発言したことがある。このような疑問や答を考えていくことは新旧ともに歴史学習の重要事項であろう。なお、今年度の文化祭において「美澤進初代校長生誕170年展」を主催していた卒業生と話したところ、昭和44年ごろには、大砲はなく、砲台は残っていたという話を伺うことができた。他にも、前述したように従軍した人数と戦没者数など、生徒自身が具体的な史料から疑問をみつけ、仮説をたて、検証していく方法を指導していければ、新しい学力観にも有効である。こうした取り組みを続けていきたいと考えている。